

今日の説教のポイント<使徒言行録 28 章 11～31 節>

①勝利の凱旋のようなパウロのローマ到着。そこから教えられること。

囚人としてローマに連行されて来たパウロを待っていたのは、信者たちの温かい歓迎でした。まるで勝利者の凱旋のようです。「パウロは彼らを見て、神に感謝し、勇気づけられた」(15)とあります。神様から告げられたこと (19:22) が、こういう仕方で実現したのだと実感したのではないのでしょうか。ローマでの自由な扱ひも、嵐の航海の中で見せたパウロの姿に打たれた百人隊長の指示があつてこそでしょう。私たちの生き方の良き手本がここに示されているように思います。

②パウロがローマでまずしたことの意味を考える。

そのパウロがローマで真っ先に取り組んだことは、これまで苦しめられ続けて来た同胞ユダヤ人への福音の宣教でした (13:46-48、18:6)。しかし、やはり多くのユダヤ人は受け入れず、パウロはイエス様も引用されたイザヤの言葉、「聞くには聞かぬが、決して理解せず」をもって返しました。一見厳しい、彼らを見捨てたかのように思える言葉です。しかし、そうではありません。パウロは同胞の救いを祈り続けた人です。

③ユダヤ人はどうなるのか？

パウロはローマの信徒への手紙 9～11 章で、「同胞ユダヤ人は捨てられたのか？ そうではない」と語り、神様の救いがユダヤ人も含めた全世界に行きわたる深いご計画について述べています。それはパウロの勝手な思い込みでしょうか？ そうではありません。それは聖書の神様を考えたときに出て来る、まさに結論です。どんな罪人も救うために御子を与えて十字架にかけて下さった神様から考えた結論です！ 聖書は「部分からではなく全体から考える」ことが大事な信仰の書なのです。

④同胞日本人の救いを祈り願い続けるキリスト者として生きよう！

私たちも、「私は真理を知らされ、救いに入れてもらえてよかった」と思うだけでなく、パウロのように同胞日本人の救いを願い続ける信仰者でありたいと思います。それも、パウロのように、憎まれても、見下されても、どんな時にも神様の目に適ったことを第一に置いて生きる生き方によってです。それこそが真の愛国者ではないのでしょうか！